類聚名物考

六

歌物語

百十八

和書門 類 一八六〇二 號 八の函 一一架 一五五冊

内閣文庫 和書 類 一八六〇二 號 百九函 二一架 一五五冊

内閣文庫
番號 和 18602
冊數 149 (112)
函號 209 104

国立公文書館 National Archives of Japan

○大鏡

○蟄(?)代花山天皇の御時にまとめたりし　村上の末葉経信(?)のむすめおそく
中しにかき(?)のむかしはなしにかきせ(?)つるかされ
りの事を初(?)におかしまうりとておそれあり
ひとつにかきつる今よりは百とせ余の月後と
て
ことものそれりしを□し　帝の御おりましける余計なる(?)
いつるまさた後なる百年の後もとせ有をとこそ人あ
○今案ずるにかの名(?)しこれといかまつるは好(?)は
あらて大鏡の續(?)や月影とすいふなら(?)し
月影とすのそれんの證(?)や此歌こそし　像(?)おほ
ら八この貌

日本政府圖書
淺草文庫

○東撰六帖集　春部　○夫木抄　春雑
思ふ事ありしもうゑにつみおかれは松のまつはしらおふみこそけれ
○為相好忠集　三百年前のこゝち　○夫木抄　春雑
さきつきすゝきさるせる春毎にゑひさきを祝ふ志らすき
○万代集
いそのかみ布留の社の太刀の緒の結のをきなをも我君のよゝ
新六　歌九
年へぬる住吉の古き松あれは
植ゐる枝とや川に枝つる

○夫木抄
第一
○承徳二年正月庚申夜和歌　子日
いくちよとかきしらぬ世に子日しつまの松の小松をそひく　赤染衛門
○万葉集雑歌　万葉八
春日のさとのわかなはむすひの若菜つむ妹かしらひもしらしとも　よみ人志らす
○家集並歌中
君かため深山の野にかきつもしつのをたまきの志くらふかさく　俊頼朝臣　志らし
○万葉七月の七日仲実朝臣の許へ山菜つかはすとて　俊頼朝臣
ともかくもかはらさえをたのむ志ふえくもれせさしことへてもきのとき
返し
いかしみふまきくそつゆのそしとかきりたあらふ夜りは
○同　あさくへのとこる
かるる雪の花のあふに出て松の女もあまへのこゝろにかやつむらん　藤原小宰相

手持ち
いつも粧薬の名はきかへの下欠

萩をと
千首
おもへ人下欠
小倉後嵯峨院尊勝寺六波羅
津守国基

松人をせともみてなむいらのこゑ韓ねきゝいうたに向ふ松人
雅世

第七
○宝治元年十一月百首　民部卿為家
花さそふちりかふすなる小車のとゞろにひゞくそゑるともなし

○花のなとふりける
西行法師
山櫻よしのゝやまのむかしおもふひとの人の袖にかゝる人

○たか松殿歌合
基俊
こゝ山ふかき花ふしのかげにさくなきやまれともとの花ゝこゝろし遊めり

第五
○雑
たゝなるはなの雅との一夜ふもひとつ山にはなれてそふ
六帖
太宰衛
○蛙
つとめすにみもせぬ雨をあかすすみならぬる蛙のなかきとそ
光俊
○新六

第六　家集
すみれつむ谷のおくにしゐ見るへくかへらんこともわすれはてけり　俊頼
家集　山吹　権僧正公朝
手折しふかりし白くわりつてのいはねの池の山吹乃ちるらし
永元年内裏百首　春　内大臣
訪ねつるはかけとた清くつきしきの岸の山吹をも
家集　俊頼
山吹をこかねしらせにさせは盛らむと井出のかはつの物かたるらん

第七　夏
家集夏ふもと　源仲正
夜かける二毛の簾のをりなりけり中にかはりぬる葉は木末なりけり
建長八年百首歌合夏歌　従二位行家

神山のかけの記をまちえたりきようけつるすみける月はさやかに
新樹　百首歌　慈鎮和尚
いまよりは夏のふるさとのこのもとに時はすゝしき風のちる里
家集夏の初つかた家のかたきの木のきたるにこそうとおもひ為和歌　源満信
とかける庭のかきねの木くらきにのこれると
堀河院御時百首　卯花
卯の花も神のいかきにさきぬれはしろきたすきかくるなりけり　俊頼
六帖に神祭り
さかきはるますかの白雪ふりけてしふかはなかりしの山のみつせよ　権僧正公朝
家集　神祭
まさかきにゆふしてかけしきさらきにしけにぬきて神あそふ　六条右大臣
葵　従三位家集
かつらかのはるかにけふはまつりする人のかつらに
このかはにて月のころ　はきさきののたちへときこゆる人にも

きえをつゝみてよめるなるへし

子苗　文治六年五十首百首　　　俊成

かくしつゝおもふこゝろに立田子はさなへよりこそたのみそめけれ

子苗毎日一首　　　わか家

ゆふさきし沢のこゝろにおりたちてはやくもたてる小田のなへかな

小余りにさつきのさうとゆるゝ子苗とるらん田子のかけ哉

万代
子苗三の仲　　　仲実朝臣

いそけ田子代はる[illegible]のはせのかしらに庭ならへ[illegible]

家集　子苗　　　俊頼

おりはたるゝかのことより[illegible]はてまつるの子苗[illegible]

堀河院御時百首

初苗ふうすのたすかれてはこへいくまつらんたちかへつらん

五月五日

家集　　　俊頼

菖蒲ひくぬまをふかみ[illegible]やさくらのうけ[illegible]

民部卿為家

花のやとりの[illegible]月のかけぬきしとめて[illegible]

子五百番歌合　　　前内大臣

[illegible]人ねるにぬまやめのね[illegible]

家集　菖蒲　　　俊頼

あやめの[illegible]ひけるにはあやめはねもころ[illegible]

百首歌　　　慈鎮和尚

のきはにも[illegible]たちぬる[illegible]

五十首百首に　　　慈円方

あひにと　　　俊頼

[illegible]五月のこゝろのあやめ[illegible]かけるあやめのまさくなりけり

第八 文 部ら

行くきたしたるさきの橋の二条にかけゝるに　能宣朝臣

此歌は家集宮中の石山にやまでたりけるに　かさゝぎの橋

のかゝるよ鵲のなく秋の夜なるとぞ

百首歌中　　後九条内大臣

月影のいるさの山のかひときは扇鵲わたせるくやきしらん

是は源氏物語花宴中君の言にこそあれ

六月の　千五百番歌合　ちかの内大臣

一首のは後の扇を見れば見れ　あさのきさと思ひもれき

橋河　家集　　権僧正公朝

かひかふかいのうらに舞ひちるのひつきの橋ぞてる

鵲　家集営夫乱風　源仲正

風ふけはうちわたる河立居しよ玉のひかつくもの夜也

覚　家集中　好忠

天の川のかるゝの波よる露くさくる玉のきえぬとそいひける

夜雅　三百六十首　夜歌中　好忠

庭にまる鵲のわたり　あさ中　久方の人なく見ゆと言ひ出し

後撰
物に

うるふ月ありける年はのちの七夕をきかせよ
なかりけれハ天の川原の我代七夕のはなの川霧いふへしいへハ
○抄云天河原の渡しのかいもなくいふ人もいはさりし後の
閏月ありしかとおなしなぬかハ七夕の七日を申
三十日を卅日として渡し七夕よりこれハ出入して待侍也
まるに今宵ハこいそとのこゑの七夕とハ晴まさるに七夕の
○或人云たなりきの遅ての事きにハ[illegible]
ちしくせてよりけりや
○後撰集に云ふ他の人の[illegible]七夕の[illegible]
古今集にあかりとよみてもれとなりて

守文
紅葉ば
川はやミ天の河原の我代ハ渡せる人をこそ渡らなん
○抄云天の川原の渡せる人をよそにいひておもふなく
見へわたる大納言忠家ことなりとおもふかしとて
わたしけるまの川ハかくしてとおもひしとしそて
○抄云にとりにこのかくにも[illegible]
せのくに渡りのことハたなはたの方とかはるる
とよみけるとおもふ渡しのわたりのかハとも
とよみけるとよみて渡りのめくりこそと[illegible]

守文
秋の野の露におかるる女郎花にはらふ人なくて濡つつやふる
女郎花おかしくさかりにすてにあはれハ若しくかなしけれ
○抄云女郎花白露のさくらハおほくしなれは
○抄云夕露秋野にはらふ人なくてぬれつつやふる

六
後
女郎花さかりの色をみるからにおもふかなしらへ何ハ思ひかけしもせん　三条太政大臣
詞書　さきのゐんのかくりありしのさしつけに女郎花をおりて
あつましのみこのかしらにさすとて
○初女郎花といふ花の色をみるからにおもふハ恋の女の
らぬといふやうにかくるへし
第
秋の夜のまくらにすむ人の夢路てたえもなのまきける（くめイ）
○初句よりまきならひ世ハ久米路の橋のたえなき徒
のなのことも一言主神の久米路の橋と渡
しらけらむ　いまより久米路のもうらなきたなる事なく
第七
妹かひも解ともむすふと立田山今そ紅葉の錦おりける
○初上二句ハ紐とする時ハ必立ものなれハ立といはん
なる之或説妹か紐とハ袴の紐又ハ衣のこしひも
すなはちも立解ともも立といへるかくよめりときこゆ
長月九日
露（霜イ）のたまくあれはみかれハ　いせ
葉のうへにおきてねるへくもいつかくにに千年の君とも露にて
○初露のおくしもものにたるとよ詠たるを露にこなたの
君と露の様に葉のうへに垂とく錦と君をあつくしく
又いせと垂掛て葉のうへにおもひめくするもうもいなきも君と
露の様よ詠して葉をハふくらしく契きぬるといふ事なし
多なるへきなし
第八
神な月時雨ハふりハ降ぞして行きの人かさやとりなるらん
○初時雨ハふりハ時雨のやうにゆきかへり行旅人の時雨なかりハ
さんの様よさくとハ降りしてをも色もやかて降たとく
○後明も少に雨様まやかつてハ雑るすとなく

○後撰和歌集

第一　春上　惠比（？）
元日に二条后に侍りて白き大袿を賜りて　藤原敏行朝臣
ふる雪のみのしろ衣うちきつつ春きにけりとおどろかれぬる
○衣縫（？）　注（？）

第二　春中
貞観御時弓のわざつかうまつりけるに　河原左大臣
けふ桜しづくに我身いざぬれん香ごめにさそふ風のこぬまに
ちるのまつかへつさ（？）
我ふるさとにあまの山の花さくらがりも（？）せとうつるみん
言語（？）さらの古今引哥（？）

第五　秋上
題しらず　読人不知
契りけん心の契りはかへし（？）こん年の一夜まりぬる（？）
さかなし（？）註志つるかくこれ古今集
○初年のひとよをあふは（？）あふとはあの七夕のあくるまで（？）
七夕の中（？）よめぬれは契りしるのふりはしらん（？）

○初年に一度とはいへども一年とは
いはじ何事もいはんとて
たなばたの年とはいはじ天の河雲たちわたりいざみだれなん　読人不知

第九
立つまかる所志ても侍りける頃又あひ志りて
侍りける男のもとより日頃へてひらじてうせまうる（？）
とふ人（？）をひつるといひてつかはしける（？）　伊勢
おもひ川たえず流るる水のあわのうたかた人にあはできえめや
○今案ふうたかたとはあはのきえぬるをいふ（？）
あはれ（？）にてようかたかみの流るるとうけしられかけ
ゆえなかりし語ておもふ（？）
題しらず　読人不知
わかれてふぬるぬべき（？）かつて袂のよるよるなみだの（？）
立かくれぬれてはひめなる（？）塩焼れは世の浦のさかとこそ（？）
そのみとふこのくれこへよて枕まりける人の衣さて（？）

もりにこもりけれはつかはしける　さきよみたりける

うへとしし月日とともに梅の花のちつきもなるらん

月日し

月日にも梅へけれは思ひもよらぬ我身なりけり　なるかなり

○もとの葉に付て何の所よしありけるにや

物思ふ事ハ　けるかの後よ見ハ細かと

の後恋や時の事も

絶えしもし

ともすれは物思ふへしとも思ハす後人の心をしたるらん　また人しらすして

○のちあひ見しハ後ふと思し時の事をやほのめかし

わすれ　○我後の女にかよひてありきてもはなれしくへし此をそ

思ひそひし言出ふ思ひけれハ人の身よやりたる

とそあり

人とあひしりて後ハ消息もつかはさりけれハ

うれしく思ふ君か物をしい思ひしらぬかとも思ひあはれなりける

○消息もつかはさぬにや物思ひにもかりせぬる

いまや

思ふ人侍りける女を物のたよりに見てけれとつれなかりけれハ

いつかはしける

男

思ふ人思はぬ人のおもふ人おもはさらなむ思ひしるへく

女

こからしの森の下草風はやみ人のなけきはおひそひにけり

○思ふ人ハ女の思ふ他人也　思はぬ人ハ男也

ハ女の思はぬ人まにこかくれの思ふ人まての

事なるとそおもひしらん人その女の事の様

とふよも思ハさるへし　おもしハ神なるかなと

といひし人と　二句まてや

第十 恋二

二 かうとくぬまのあけの衣ゆゑ袖はもとけぬれ（さくイ） 清[illegible] よみ人

○この歌解ぬと二句め又ぬけともいふし

月とあかれといふ言ありて人のまどはれは

三 ひかりの後のまきやうに起居つ月とかきれと見えてつる

○白氏文集の言く

初 今まもつらおもも并ゆりはつかしける也 此大系

思もかくもふとのちの人々ぬべし家のかゝることく

○此歌家に家集の中務家仲文集ま入れ

男にとせさりければ 大系とていふし

むしらてで 大変里を

白波のよみする夜もとこし身の様にゆくみ恋もするらふ

○伊勢物語ま第二の歌と同しくて来と書すとは

まふくおりの御ことを

兼輔朝臣にあひそめてつねにしもえあはさりけるを

かり

ふりそにぬまのあけの衣ゆゑ袖ぬれまとものぬ（さくイ） 清[illegible]母 初

○よま深解ぬとありて袖に解ぬと侍るていふ

中にも解けいふとはいふし

思ひしにかまひ侍りける女のもとより 掾史 侍りてえく

つらけるよ掾子掾きぬえへりけるよ えたん 釈

うたとはきとしぬるのすり言さんにはかしいみきときとのことなく

○掾中の言 延喜式中に 儀式にある 喧ある 吉事と言

掾度には此家吉とかると式に吉とは掾とすいこの

たと後のたらいに吉との掾と掾ときせるゆえとも

のとしてふとなる物よは吉と書の掾言と吉と掾言

との見あまされて此木へりし吉と掾ちしては

下のまるとのこなくまりけ名き上はるまてこそさとへき

国立公文書館
National Archives of Japan

月ハいつれといふハいはむめくりといふ人のたとへなりけれハ
よき人しらすを
ひとりのミしいはましにおきそめつる月とゆふくれと返しそ
つる
○今業平小町業平まて詞ある中将なる男
のおもひてまてかられて入る月いとあはれなるを見
てぬるをこそいともちとりけれとすのこまなるにわれハ
男いもむかふるそのとゞくハふるときゝぬるそ
ひとりのミ──
とてこのかた入らいつれなやまたも
人とおもひかけてつかハしける　業平文
ただみるたのむにしあれとおもひまかりけるに歌とこたふる
返し　　おもひつれ
わかみのせきにかまへ認かへるにあめもしとゝにいつれとふる人

第十一　歌三
東ハさかきもやうしろ経のまへんと人ハこれとおもふなん　東のもとへく
返し
わすれよの思ふかとすきもそけふくるかなるのこてハいつしかも　よき人しらす　あるなん　まなれ
第十二　歌二
わひしてそ侍りける人のまれなのあらんくなれハ
目にえくてもうけまぬ角るはむのつきるかりしも　伊勢
わのみえそゆめかなれなりと中からにかくりこそおもはまかりし
さとりとこそしつかしけると父母侍りて制し　侍り
われハえんあひ侍りて　源の朝臣
いふそてもかなのおもえもえてしかなかなるめるのさことをりてゆくらん
返し
逢坂の関とあらハ我なれハたちてふらん人かくしも思ひ

返しはとらんのを略せり

人のもとにまかりて見てつかはしける　よみ人しらす
結ひてし日は昔の今日にかはりけれはかくまて恋しき物の後見え
大将里まかりけるに女をとらへてまかるをきゝて
まかりけるときいはせてつかはしけるをなりけれは
忍ひ侍りて物の夢にみえてまかりてかへりけれは
かくしてつかはしける
まかりけるに女の方よりまつしくもえてうつくしけるをやめとりて
さりともつらしとはなれたるまへにいひけるをまめやかにものしけし
ゐとはいはて侍りけれは
うけたまはりてこひもせしものをとおもひてまかりてなかるとゝも
思ひける　人につかはしける　枇杷左大臣　時平
忘れにしといはれて折節のなるをもうしとするものかはつゝ

人のむすめに忍ひて通ひ侍りけるにつらくのみ見え侍りけれは　読人しらす
今そ知るうきも恋しきものなれは逢はぬ歎きに我身をそおもふ
ありもせはかなかりせしの恋を

第十三　恋五
人にもあはて久しくまからさりける人のもとにつかはしける
伊勢の海のあまのまてかたいとまなみなからへにける身をそうらむる　源英明朝臣
まてかたいとまなみ
忘れ侍りける女の家のあたりをまかりけるときゝていつこへ行そといひおこせて侍りけれは　藤原忠世
逢ふことを交野へとてそ我は行身を同し名におもひなしつゝ

男のかゝるをりしきたえけれハなりけるをこの国の
侍せりける扇にかきつけて侍ける　読人不知
人をのみうらむるよりハ心からこれいまさりしつみとおもはなん
あまてふ名とたちけるや
ものしらて云ひもかひもおなしこゝろにてふ名を
かけてたのめんこの身ならとも
男ありけり男のまかりて侍りけれハ　読人不知
恋しさに行くすのおとり橋をとりてこそ我たのみにけるまはりけん
万葉集
題しらす　小野道風
たかうハせとしにけし天の川ふみきえん宮とたのまん
此門ハ又源としたにかけしの君
年を経てかはらぬ人のつらさくものを侍りけれハうつろひける

菊につけてつかはしける　源□朝臣
かくはかりふるきをうつろふとおもはむ菊の花とはいはてあらなん
君菜菜花
かくいひかはし種はことにかはりてなかりけれハ
あしたの年のことはせは源原の忠房かしこまりて□らん
この御かへし　読人不知
第十四　恋六
又ころもかへしの人のこのいへにまかりて藤原古文
ありしよ波なきをゆめかたり我ちる　人ハあやしと
第十六　雑二
左中文宮の源の大臣の家にまかりて出ていかにかの
のかたらうことをみてゆめにはいまにみちへ侍る

三山より雲井にゆる日くらしの声を忘(?)ても忘ぬ哉
宣旨(?)
鷹司(?)政大臣
かれ(?)
日くらしの声を忘てけれハ一山とわりなきも
きゝぬし(?)
第十八　雑に
読しらずて(?)　いせ
ちはやふる川は神まふかくれハこゝろまよとくれぬ身ハうき世ぬ(?)
人の鋒(?)のかきそこんといふしてやまりなけるゝ無(?)か
二手する人あまとゆゑハいやまうましてこゝろかれハ何とも
かりのゝとそりてかくる人やけるといひつかハしける
女の田(?)
かうんとひしいふりと命まてまつまたぬへし　時のゝ
みし
むこ
かきるふくぬ身のさわうくおかなへまうしきても抑まけるゝ
つまよるかきさ名立侍りけれは
伊勢

ちはやふるは秋なきことん百姓の人はかはとまつりをこふ

第八 みて　　　　　読人しらす
年ふるにはたちのこりに花のにほひはまつにあらん雪
何とたのしみ　何この花をみるは白雲
やとしらまし
この月の年のゆかりふたゝひはなきはれや　鳴くしらまし
三條のまちにおはしていひかけ
聞こゆる所とよみはしてむかしの年はさかりてものをもかは

第九　恋一　　　　　　　　　　　　　　　こゝろなきこゝろ
源のわきかふるをきてうけることの事 [illegible] まかしまれなり
侍りまゐれ侍る講の聞の元より知わきをともにみゆへ
つかはしける　　　　　　　　　　さるかり
まとろまぬ聞かくも人をそらつきにかりかへさる [illegible]
聞の傍のまをとこへなる

第九
女のもとにつかはしける　　　　　　よみ人しらす
秋の上よ祈るかしるかく源のうきなくも人とよもよみてのふ
いかりにみかくさへてなまめきてやすりかよかけのみ恋
○源よ祈もすいふりしよ秋もとかくと詞る
いかし此よなりしをて

○赤染衛門　家集

第一
正月に出家せし人の杖つきたりしに入道殿より
いかなりし杖のさきりの日ひけるもたれにとはなしと見えしも
つくし出家して人にもとはず山の端に袖をたれつつ杖しきにしは
ひきつれて
女院の姫君と申しける人にかはりし比の石のおもてをと見ればなれ
むかしきの志ある人の庵の名にこそは　ひろくかねはわたりゆきてとられ

第に
いつまで行かりしに返りの人帰りては三日おとせざりしかは
んなかなかおもふて
よう思ひて人も見えずば古への志ある身ともおもはれぬるに

第二
又ちかりけるといふ家にとまる夜夜の更けに志しおりて涼むに
身よりの二人ぞうつり来て清めするをも問へひやう

あるとしひつきに沖中の行きそとして
沖中のくみふとやめるから人もとどまる身を人のくめし
あさふかくしも家になりよりて揖れいると出して
舟さへ海かるまて家作て家作代りうみの人といふかやあらん

たへ成かはしのあるうへし

業平家集

天河よのわたしにいくのほとるとも秋のよの夜半のあさくひら

夫木集に　俊成

おしなへていつもいさ人のかふ今宵おもふむかしのつまはかはり哉

出新古今

こよひまきのとをなみあれてかはかは八重しらんやさらしかくしや

後鳥羽院御製　吉野吉水院にて

花をよしや吉野のよし水の枕のしたもる　ねぬる

拾遺集十八雑賀　柿本人丸

いつまてかしらとおもふすみこしもこそ　万葉　古今和歌集　ほにいよいに　ととあ

日十九雑恋

世の中はいさやいさや風の音は秋にあきのそふもちそふきれ

後撰十八雑はいせとて入

拾遺集廿哀傷　題しらす　人しらす

世の中をかくいひ〳〵てのはて〳〵はいかにや〳〵ならんとすらん

後撰集九恋一

おもふ人おもはぬ人のおもふ人おもはさらなんおもひしるへく

同十八雑に

世の中はいさともいさや風の音ハ秋に秋そふ心ちこそすれ

拾遺十九に入たる

後撰

後拾遺三夏　伊勢大輔

ふるさとにあやめもあやめかはらぬを菖こそおもひしやまとおもひつゝ

同七秋上

秋もなほきこえひとしきの月もつきてあらはこゝろつくす君なきみ

同七賀　藤原保昌

かけしかの杉のおもやまちいそあかりこの子おもてはとひこそやれ

同十哀傷　橘季通

とひつやとひつたかぬまきハ別かなしのさかれなりけり

和泉式部

そのおもひ言おもはれとおもふらん人にハまさらん人にハ道きりけるかな

同十一恋二　赤染

なのめなることをたにこそいひしかとおもひやせん

同十二恋二

いとふともかくしてもなきやつれにもおもひわたるぬこころかな

同十三恋三

わすらるゝ人をおもふことにおもへこそかなしかりけれ

同　雲林院前大臣

わすれなんおもふ恨をこそおもはんとしたにおもひあかせよ

同十四恋四　和泉式部

白妙も花も此世もまよひかなとさとりはいかにしゆかむとかしりけり

同廿 誹諧哥 源乃能

さゝさしは桜を人のとゝむしや桜のはなはさくらくれなり

よみ人しらす

たゝらしはひとおしなれたふとまとふ人とたえはしらん人

読人しらす

後撰 古来

はしめには花や霞ふかはまやたつとひとしとゐもまとはゆえつ

読人しらす

かしきやこめの浅猪つきしもしもてしとうきの神

長秋 古来

かしらまも桜をのこそゝやいさ山桜はまきてとしかけ

夢し葉六

うつしもかなもは外出しきいてつる夢もはかぬくなり

同八

夢とたてりかしきと夢かばにはかかるにかへくもまとつふ

業平朝臣

山世葉

後撰

よの中はいさとしいはや風の音の秋にあきさるよもこゝろもれ

こまてのやくあのさしいしふむかしくの夢つきやかんと

○慈鎮和尚

たのもしや我のちの世ハいかならんかゝれハこゝろにけふもまかせ

○俊頼朝臣

さくらの花もよの常ならや世の中ハおもひさましけりなかりけん　新古今

○源順集

あらしもこゝろもこゝろもこゝろしもおもひはもきのこゝろも我こゝろなる君

○後京極集

こひやせんいかにせんしらんぬまもなかしれさともなくていかにしつ一夜と

○僧正遍昭

こゝろこそいまよりさらにみちならまいにこゝろゆるまてなき

○源順集

あらしもこゝろもこゝろしもおもひはもきのこゝろも君我こゝろなる君

○小野小町　古今

世の中ハ夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれハ

○拾玉集　慈

いとかくし我身のとかハさらなるにして人のつらきのつらくもあるかな

　百首述懐

我ならぬ似ぬことなりなんとおもふこゝろこそおもひぬ人なりけれ

　日吉百首雑

旅の世にまたたひねして草枕夢のうちにもいめをみるかな

　寄二

これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬもあふさかの関

　花山院御製　行上

一日百首

みよしのゝ山もかすみてしら雪のふりにしさとに春はきにけり

雪

宇治山百首に
世の中に山てふ山はおほかれと山とはひえの御山をそいふ
同三 錢百首に　梅花
木の花いとひとそ友風なれや梅にほひちるはちくさの木
同四 法楽日吉百首
枝かへるもかなし入もうかし山の端乃月こそ心の松風
同五 建久二年 みすの院御堂安居院関探のもとより十二首詠と申ける
なかなかにうきも世にまかせてあはれとなきつるめふはなかなかせくなりけり
なかなかにおもひはおもかし心ひとつにまかせてもつるにかなきたにつれてもよし
同
これはまことにおもひのあまりにおもひあまりにうき世に出てとゆかしき世のなかにひとも
同 式子内親王
そのむかしたのまれしよに世に出てもうき身をしらぬ身もかな人こそ

同五　そえ　伊勢物語に
ふりけや芦屋の人もよふ人もむかしのもかくも芦屋からうつりか
前同 詩和百首　雑
来とへし花の春の春風にさし桜かれそちるうめのゝさらに
同六
世の中はうつのやうにみゆる世にありつしたゝ猶おもてうきはめかり
同 朗詠雑百首
前ものにつゝとをまめなるものなりけり実の心にまかせてなき身なは
同七 野秘抄名
さとしもまことに思へとも心のかふうきにおなしあはれ
とりはおくまて秋か志らぬせよ秋の花をしる
人はつらしとおもふ人なれと人をたのむ人の身ひとつ
同七
待よひいとわか所にしら秋とうつれそ西てひとりしもゝ秋たとゝ豆の
豆楽共恋
ことはゆさし

○西行法師出家の時男のいとけなき女の子有けるかなしかりけるを
是跡にし遁世して捨かねつる子を捨ける由をよみし歌　詞花集ニ
世をすつる捨る我身ハすつるかハすてぬ人こそすつるとハみる

○赤染衛門集一
秋ハ男のきまハ秋と志ちかき詞と君かりく誰と問しそ

後撰集九　恋二　よみ人志らす
世の人の辛夜人のよの人かりハさしる人さしきをく

○雑類分

○後拾遺集三　秋　播州分入ル
了ゆまて大東山のこゝ秋ゐつるのつるハ姻なるらん

○おほし　同

うきまさておほしてあはめれは月のこゝろもしられけれ

○神かしは神　鴨長明百首　神祇

やまとなるなめしとつくせよ君か代にちかひはせける

○たかつと立めし

かさきても―――あさきなにはとてもしらすもらしやるからん　貫之集に

○あまりよまきる

いせ集

あまた―――人の身にいりておもはかるなきとおもひしる

○ふりさけみれ
いせ集 こゝろやすくものかひもかたらへも伝も ―
○あしまよふ
○いせ集
いしいまあしへゆくこころの我袖はかくれぬかわくらむ 古今
○うつらふうつれ
○いせ集
我袖は ― なもとつゝつゆなれて この花
○ところもとゝきても
○いせ集
おもしろく ― ときはれかくへきことなかりけり
○後撰集秋中

○きえ消えて
○いせ集 長歌
我身はあはとはかりとしひつゝ ― もゆる火のみはなほもえつゝ
○拾遺集一 無名
世中は何にたとへむ ― きくるもなき
○せをせかれて
いせ集 長歌
月のまく ― なかれつゝ我身は何となるらむ
年をへては海も
○拾遺集二 拾遺抄一 恋百首家
うき世にはなかゐのへてもなになせん ― きしの下なる

くもらハこそあれ
拾玉集二 路上百首 みよしの
心しれぬ雲のひとむらせんしらハ ―― 入月ぬのちら
あまてるある
○拾玉集二 詠句百首 春
君か代ハ ―― 时ふりし八千世二あめするまつてきらふ
かくてハ松のくしても
○拾玉集二 詠句百首 二冬
―――― ゆきふれとや神ハきしらん海きくつのとゝ
○かへるまてれ
とし(て)きし ―― 後拾遺集 春上 藤原頼孝
ふ穂風まちゝにきらき白ひとと

ひきこもりすみ
○こゝハいつくよハいつぬ国くこの花ひらふ国 ――
○続後撰集十二恋 よそ人しらぬ
いつさら ―― むつしきんハ君よりまかし ことのと
たえこそえすく
○蜻蛉日記下
されのつかのむすめの女子のとり ―― あしとやかもりん

かくしなずと
○こゝろへてりかにもよそ間しりん乃宿にハあるまし
○後撰集　八月て　よみ人しらずと
かゝなる月しさしのみなきとこそれなみの初めなりけり
ふるとふりしと
今撰集三　梅花をよめる
東風ハ――　梅の花さけるやどりハ恋しくて　やのなく

入まれさきてやまれ
られむかしもいかれ人さても　あれなる比とかの待まちまれハ詞
そうのそもしゝこまれのやよ並くら
○紀友則之家集
思そへふし――　うしのなかぬつらしけるにりのある我身と
○古今集
花こそなりの
○かはつなくのこれも山吹の花こそなるのなりにつれ
○さる歌撰に花とこそたちなのとに山吹をしものゝまつりにしるふ
○きゝえてハ消まて
君ぞあけし――
家持家集巻
秋たまきのこれもたちかねける者し法田

いろまさりゆく

拾遺集三　得業百首　恵慶

常の緑よときはなるかきまさり――ちとせの松

おもひまさるとも

○今撰集　十五

我宿のまめのこゝろにたちまれのおもひもあまりてもやらぬまてに

まさしかるへし

○今撰集　中納言兼輔

人しれて恋しかるらん我宿のまことにまさしかるへし

たちまさるらん

○後撰　いかてかいはんかたなきに恋まさるとやみかきもりたちまさるらん

のきはの松にすむまさるらん

○續後撰集十五

やまふかみ――山おろしの風のこゑそまさるらん　俊成女

いたりいたらし女

○古今

春の色の――さとはあらしさけるさかさる花のみゆらん　古今　読

拾遺集六

春風の――あちこちなき咲るうちも咲まさるちる

あすもゆきをまちもあすまて

○今撰集下

草ハ読よミつる郭公かなや——

ぬれぬともぬれん

花ハ方のかゝま搦えりふしも——　新続集

——ヽ栗の志ゝ客

草ハいまなかん

○いひかしかゝまれ志いさいまたんるらくハいまなへなとく

○後撰集第二　春中

とかりハ——さ霞のたつのくの桜をさりへかさらん　素性法師

○続後撰集第三　春中

吹風と　ともに——桜をちりかふころのまちるりし〳〵ともさ

ふるやいちんきのみこやいさん

○後撰集十五雑一　月のおもしろかりけるをみて　うつ

さゝらしやみんなおもふつる月影と ——

○古今集第一春上

年のうちに春はきにけりひとゝせをこそとやいはん今年とやいはん

○志賀のよしゝむ

○源氏集

君がため人めかりつるよのさまちてしもむ我よりまさるよ

○みそぢまでいしもみるまく

○蒼家守長家集

——　のこりなし花のさかりはたとへきやしぬらん

○志賀のしきし

○源氏物語集

—— なにもなくはかなきとものあはれなるきん　○後撰　よみ人しらず

○きしのかぬる志つれゆきぬる

○源氏明集

とふきいりてかくなりぬとは ——

○草ともいふと
○伊勢集
うつりも心はねぬさよの草と――ひきそふるふ
草のうつり
○今撰集上
さくら花さしとんとまたちりなん――うちの山風

しるもしらぬも
これやこの行もかへるもわかれては――あふさかの関
○今撰集上
秋山の八重のこうちもみ　暁又明――うつしてとりなん

いかゝや いのちよ
後撰集十六雜に
世の中ハ――風のおとせしもなハとのや出しき

いさゝもいきや
○後撰集十八雜に
世の中ハ――風の音ハ秋くは嵐ふかちこそすれ　いせ

秋くは嵐ふかふ
○後撰集十六雜四
世の中ハいきとしいきや風の音ハ――かちこそきれ　伊勢

三句異
○拾遺集ニ融雜百首
雪ふかし山路よ深しまは来る人のなきそふれしき

しもとゆふかつらきやま

かつらきせん枕詞はおもへる諸説しもとは繁木また山の茅の石
とよいふ木のかつら幹の事也しもとに生たる物なれは木のいつきにとれを伐て
薪とせんと集めるよしなかるへき葉かつらもとを結ふ物なりかつら
とつけて葛城山の枕詞に寄せり又は楚を訓へし楚はしもと
訓て紀除とも誤てしもとのまゝ笞杖とよめる荊楚之白氏文集
廿六想東遊五十韻の律詩に懸旌　轉束楚(ツカネテ)蔦(ヲトロウ)綢繆よつんつよ
同し

御作や　三輪

未来抄に花　建保三年内裏百首　俊成行家

御作や三輪の檜原の木の間よりちりくる花をさそふ嵐か

玉葉の歌なる

〇後撰集十三　恋に　海原につりするあまのとかなん人あらはこれ

玉葉の歌ふのみちを人に知らるるしもかへりきぬらん

〇ゆかりさきて　胡目

この秋詞万葉集にまたなく、後撰に万葉よりなりてよみたり

〇源氏物語

世の中とるかたくなんゆかりさへなつかしき武蔵野のかんの露

〇万葉集巻第一　天皇遊猟蒲生野時額田王作歌

茜草指(アカネサス)　武良前野逝(ムラサキノユキ)　標野行(シメノユキ)　野守者不見哉(ノモリハミスヤ)　君之袖布流(キミカソテフル)

〇同上仏覚抄第一にいふと注すとゆかりさきは天皇の御世をたとへたまれいはあかねさすと茜草指とかくとも

さてゆかりさきを一本ともいふは帝を申すたとへなれはあかきなれると

ゆかりさきとこの[illegible]へきにあかきといふは古語のよろしく[illegible]間の

さはとよみたるは根を用とすることの心その根赤き物なれはなり

さらに武蔵とつけ[illegible]紫は源まとりへ[illegible]同し[illegible]

按ずるに此字例の下も紅ハ御赤と紫とハ源赤とせるハ所

後に鳥羽天皇の若宮は深紫の衣を着つる妹とつけまへども

紫の色は武用といふ事に用ふるきさきの事ハ入るとハ今詠給し

ゐまさかる

三垂 漢書巻六十杜欽傳七 関東諸侯無強大之國 三垂蛮夷無逆理之節 ○注師古曰三垂謂東南西也

志らとりの毛る羽

やちとせのよはひかさね白雪のつもれる山松のねよりのこゑ 定家卿

風呂の戯原 新林捨葉七

門月割子 新林捨葉六

鈴口の酒漲 新林捨葉六

拭巾（たくひれ）の晦日好し山吹 新林捨葉二

紙楠やや川へ 新林捨葉七

さゞ波や大津こむ 新林捨葉八

押照や難波 新林捨葉八

神風の伊勢 新林捨葉七

たまきはる

○万葉集巻一天皇遊猟内野之時中皇命使間人連老献歌並序

たまきはるうちのおほのになへて　たまきはるといふハ

玉の緒にハなかしとたまへる説　浅香のへしと緒てまとに

魂きはる命なりと人とあるの説に総てきはしてめまたハ玉かきハ

あはれなるとしへのしかされると多しされとハ玉きはる

いふこと緒子の字間の名目ともかりのち多かりて　和歌にも

又おほ又かくの説のたまきはるといふ内地ハ内裏之　玉きはる

とハ唐書をたまへるといふ名なり名門といへるよしに　證

詞にハ治天皇の武内大臣に福を授けたまへるたまきはるうちの治

と讀せられしかばせむしを　魂まさまさるいはゆる一つ大臣

あたらしき猟の時さる　桜花の詞と金縁と手　又ハ内地といふ事の

の書にハ紀の地なり内地とあるハ古人ハかくのかく考るや

み詞もたらハされハうへにもさせるかのなし

玉かれのこりめ

○今撰集　桜花と有るをさせるとよめる

玉葉のこのめはるさせる桜の花万代まてかさしなりけり

玉かれのこえて

後撰集九恋一

君により我身そつらき玉葉のこすハ恋ひしといふやハ

ものゝふの八十氏川
武士ハ氏姓の多きよりして八十氏とハいへるなり
○今撰集ニ
ものゝふのやそうぢ川を行水のながれてはやき年のくれかな
○新勅撰
ものゝふの河辺の
○夫木雑八　千五百番歌合
ものゝふの河辺の里の時鳥むかしのことを物やかたらなん　後京極摂政

玉垣の三津
玉垣とハ瑞籬なとをいへハ相なるいへるかきのことく
ものゝふの河辺の白鳥の鳴坂山なとゝいへる類にしく
○曽丹集
玉垣の三津の浦よせくれハ行かふ人ハ花とこそ見る

志らくさる

○未来物名　稲荷百首

志らくさるやかくし飛まとよらえてまさるの月しらまれると　おりふ

紅葉ゆかのまにし

未来物八郎ら　後水

時雨ゆかのまにしの時雨もやちりそけの色にこれて

夕霧もかなれの里

未来物八　時雨　百首　清分

夕霧色かなれの里の秋をきしかなしてすだきしこその鳴く声　順徳院御製

足引の病

○後撰集十 恋二 とをたしかなる女のもとに文つかはしける

けさうしはへりけるに返事もせさりけれはまたつかはしける

足引の山したしけきは[illegible]

大江 [illegible]

○病とのたまひしは[illegible]

おもきて山鳥といへは[illegible]

角陰字なりん 和林抄第七

玉津島[illegible] 和林抄第二

○言無詞

枕詞に似てたちはけたる詞有たとへは和歌の浦といはんとては、あしはらの浦とも、あしたつのとひてるゝなとは、ひの詞なりてのせつてとひてゝとて

うしほの濱

○秋下文女浦集 三鷹濱

うしほの濱に立てる芦しひはなるおもきしとるかはは

かゝけゝのゐるらう　芦浦

○秀句

ぬまつゐるゐ

○絵合ハ案八　さしおやかねのみせとよいらりてられられ松のおとゝ

おりかえきけるしのむつかしる

かけまもて立かくうれかすむぬれぬるなる松のこゑくのふ

とらうしの吉祀

○いせ集　やまとうよいまそて赤りおらんとなしてお

こゝのなゐりよ待らん年ふるも路ぬる人もおもしとえへハ

又あるをもる人所のうよのすつれハ生りいうそれよなんへ路ぬる

人もとあるハ人ところくる

夜のよし処のこゝろまうるゝあかられんと世の程なるしみくる

おもふこゝろの

○いせ集

世を海のへのことさへみ身をしあれふらむることゝならて波さはける

思ひそふのみ

○いせ集、

人恋しきを思ひそふるかのわ二のねは我をこくやみえと思ふらん

聞えしらねは

○また夜ふかく時鳥　西行上人

ほとゝきす鳴つゝをるをみる波のうへは聞をおくしゐのうへ

まへにてものちくちるこゑも聞し

○拾玉集六春、

鶯はむかしのゆかりの声なりけるはまつりそめける鳴初ともなく

○むかしの初音のおとまし緒とても鳴まさりまさらん

花のちらんとする時も明ぼのなくてこそ鳴や

らんとく

おのゝえ山あ
○源順集
おく山におのゝえ山ゆくと見えたつのさくまてきゝぬとやおもふらん
花のひもとし
小野小町集
きく草の花の色を秋の野にさかへたちらん人やらぬらめ　秋
○いつはるかなきは数そふ
○小松小町集
見いかく世は数そふ世のかくていきもれ花の月まて　ふらんのへ　新古今

かをたにぬすめ
○僧正遍照集
花の色はかすみにこめて見せすともかをたにぬすめ春の山風　古今
かすらへ
○玉柏八首
猿のいそ花散るよ見しとはつくりして春のへぬる夏虫のあと　家集　藤原雅経
君はちよませ
○源順集　○拾遺
松かねはかりしことそせられけれきみは千代ませ君はちよませ

紫の風

○夫木抄六　家集　源俊頼

紫の風を吹ける楝の花ちりて落る布引の瀧

風ちりくる

○拾玉集六　冬

松にてはまさきのかつら山の端にさそふ風ちりくるによするかな

かくろふ紅葉

○夫木抄　定家卿

泉川ひもくれの二年月まかりて落る秋のもみちは

月影さして

○拾玉集六　夏

玉川の里にゆかしやさらに木の下闇月影は見えて今宵の卯乃花

月のさかりに

○夫木抄七　建久二年四季百首　定家卿

玉川に月のさかりにかゝりけり入りけるをねぶる卯のはなのころ

色に宿かる

○拾玉集七　恋

うちつけしかはるる袖の露をさめても色に宿かる月の影かな

氷とあふ

○拾玉集　七月

秋のよのそらはさやけき月影に氷おふる宇治の川波

梢にうつる

○金槐集　上　秋　六月

風さむしとちの梢に露に宿て梢にうつるあきのよの月

本末の浦の
○今撰集 上 松風 似雲
かくれなきもかなもいつの時分にか木の末の浦の嵐の松風

霧とかくる
○今撰集 中 旅人 熊
草まくらさし出る荒なる宿なる我家とおもひよるらしこゝろ

嵐に松風
○拾玉集六 雑
人もなし嵐に松風里に月あはれあえてとどむる山のおくの峰

門七 秋雪 名残
浦とひとつの海
船とこれを捨てゝ出かしきもる塩の

花のゆる
○今撰集二 雲路花
いはねの雲の世をたちの枝はしまてるかなみや花のゆるさん

風に月もちる
○拾玉集四 西前月寄 名
庭のまかせの竹とつゆりそ風に月もちる霜のさやけき

風に吹れる
○拾玉集五
つまきる紅葉の枝とかれたる風にふかれてある心ちこそすれ

花ぞこのまちられてし

○六百番歌合春曉　定家卿　○夫木抄

霞かは花鶯にとぢられて春にこもれる宿のあけぼの

判は春城楼閣鶯も書といふ詩の心を深くてよろしく聞ゆ

色なき浪

○夫木抄　春海　建保二年名所百首　従二位家隆

春風の名不吹上の浦によするいろなき波の花ぞなかりける

ながる

○兼辞　流　泣涙

水の流るる涙ともかくさらさらく

○後撰集十九　離別　男の伊勢の国へまかりけるに

君が行かたにありてふ涙川まづは袖にぞ流るべらなる

宋のたかとかいふきみとりて人の事まかりけるにも

るかといつりいれたりとかりつまめいくる

とするなといふなかるし涙河うきなとまつくなせとも

ながるらん

こかる　焦　漕

人物のこかるゝと舟の漕ゆくとをかよはしていへり

○後撰集十九　離別　おあつまへまかりける人につかはしける

おくれなん心にのりてこかるへき浪にもとめよ舟見えすとも

○和歌部　物語

詠歌　歌論議　和哥道

歌傳道　八（やくもたつ）石　古今傳授

古今集三傳　同三吏傳　古今傳讀終

冷泉家秘授ヲ皆傳　勅撰和歌集時代

撰集之人寶ニ侍　古今以来撰集ニ入

宗道家　古今地下傳　堺傳授　奈良傳受

歌ノ傳受在家　六條家　二條家

冷泉家　哥之師傳　歌道二流
歌道二流　二条家　和哥六部　判者十体　歌之父母
詠哥略頌　大和三景　大和詞之歌
歌合始　哥讀歌仙　古之歌讀
和哥八病　同病梅病　御製哥
歌詞稽𥝱　哥席　和哥文字之言
歌学　哥綺文字二条冷泉二條東侍
歌書　植物動物　歌枕

長点　合點　撰集讀人不知哥
藤原俊成卿定家　珠句讀句
哥之侍僻案抄　和哥と琴と合せ候
和哥動天地感鬼神　詠歌枯橋再興
詠歌華諸朽再生葉　六歌仙評論歌仙一双
當座詠歌　歌之由来
百人一首哥　雑題　探題
結題　御製哥作法　披講吟歌

新撰髄脳 [illegible]

入内屏風和歌　　十二月和歌　[illegible]

八家詩歌作者　　数所和哥　百首詠[illegible]

懐紙　　短冊古今見　　識字之哥

辞世　　詩哥縁起 [illegible]

宿構　　歌仙　詩仙　歌題　詩題

詞翼合　　好之俗雅

歌論義

○大鏡 第五 [illegible]

詠歌

○匡謬正俗七 左貴嬪晋元后誄云内敷陰教外毘陽化綢繆庶政密勿夙夜恩從風翔澤隨雨播中外禮福遐邇詠歌皆云古賀反斯古之遺言也

○和哥乃道　十五

今ハ哥道とてあるちからにて事数もおほくしてたかふくもまなふなれり　かく儒学にある人ハ歌とふ事人の心のしわさなりとそたゝしといふ人もこれ一わたりかたきことに心くいとせすしまさいはゝいうしりせんその道人の歌とふものゝなかにも哥撰を作りまなとにいゝはいゝそ万葉集より世の中の歌のためしにくりて歌ハ哥もしよきすえたとへハ頌にめてしられまゝりてなきさうしなもおりふしとかれおほしぬるにはゝ海にいかりかしくりて歌ふたくへふきハ歌のするもうまれハ中古より後の世に名目をして諸家の家業となしおほかとふうくしきれいその家ふていつりもことにしくしかんもまきに心のかきにむきさなくしてられきりくふうけんもまきおもろかたく道しくいに初め家のならふ高市倭子といふ人の云、冠纓名家勘伝家綴不暇、指ニ就ニ古偉ニ秘下

詠之一途以動天地感中鬼神上賛其妙、詰然天地不易動

鬼神不忘感なといゝ前田の玉鬘（国歌ニ）院よ今二歌讃うもいつゝ又ハまかのおの物よ天分しなとその手まくらしくもいうしいかん

歌儒道

歌儒道ハ天地ちからを和哥乃道といふ　歌儒の作ニハ和歌撰葉五秋

○後深草院九代紀十二　後花園帝の御時二条中納言持為卿ハ上の名家なりけるに
六歌仙のたくひ召撰て撰歌の中にハの部ハ大かたはせし　歌よ
まひきなや秋のさき儒のみちのよりしてはなのうちそとよもとに人けりとかし
武蔵塚深語　和歌貴人の家とうへて関東の和歌とまゝ戯海と流し
まそかちかきるれてるおきかき人もなりけり

○千載集序　家承伝成　　ーーもさうりよ　ねりへ八つの泉さくへりも深く
く洞の林苅よりも茂くー

内閣文庫

八雲道

やくものみち

○続古今集序云基家 はるかに仁和の帝付給ひしのこしおきすゝ
むかしの跡の若葉のあまた年をつみて雲のうへを深く伝へ
まし侍るに於ても井よりきこえてめでもしつまひの
さとたるにもとめてひろく千里の山も踏見ても

八雲の抄 林梢集 五秋

古今伝授

○玉葉和歌集序 古今集聞伝授のことは定家卿の家に伝はりて二条家
上の流れに伝へて伝はる所の説も定家卿の正しき流れ千葉の末
に伝はる所の家は二条の流れをもて其の説は家説なれども広く
世々に重ねつきて伝へ来るといへども大かた今の説の
伝授とて古今集の奥義を深く伝へて世に伝はりあり
上へ流れは急なれの由ありての伝来は伝はり二条家の実隆公家
に残りて宗祇法師その説を伝授せし是と申人と
して東野州常縁へ古今集の伝来を委くその深切なるに
つきて聞き伝へられたる宗祇はその伝人たるより其の伝
を実隆公（逍遥院）のこして宗祇より聞（是を伝授と）は残る
宗祇は伝授を惜て古今の分しとも伝ふ此説を知る

然ニ三条家庭訓ニ依て逍遥院と号せし男公條に至り称名院
と号せし其世孫に細川兵部大輔藤孝入道幽斎ハ古今集の伝
受ありし藤孝ハ細川陸奥守元有か嫡子といへとも実ハ足利将
軍義晴公の末子にて母ハ三条実隆の女なり藤孝ハ実隆の
為にハ外孫なれハ伝授せられし秀吉公文禄之役朝鮮征伐の時兵
古今伝受を藤孝家にうけられし時に朝鮮へ渡海ありへきも計かたき
由にて一の大切の古今集奥義の一書を家に入て烏丸光広に
授けられ其の写とかいひ解釈する故に此集を託して光広卿
よく相続らハ三条家より伝へ柿本画像へとうとよりへき由にて家に
に入封して一首を添らる
古へも今もかはらぬ世の中の心の種をのこすことの葉
其の後幽斎丹後より上京し坂本にまうけて烏丸光広卿へ又
和歌を伝へられけり

此ての人数あまたハきこえけり三条家より細川幽斎ハ和歌のうち伝
かくて後慶長の比天下動乱に細川幽斎丹後城中にある忠興の
父なる　東照宮の御味方として忠興ハ関東へ供して
父の幽斎ハ丹後の田辺の城に籠る所に石田方より討手向ひて
攻囲せし時　後陽成院のおほしめすこときこし召し　幽斎討死せバ
古今の伝授絶へんことを歎かせ給ひて烏丸光広卿に
三条実条卿を添て和睦の扱と仰せ下されけり中院通村卿を
も添らる古今伝授の事のおもむきハ実条にも伝を得へし
とて八代集源氏物語三人并に相伝を得て
家の正脈といふへくハあるましきとして古今集の伝受ハ源中へ伝
よりて其ことの書ハ勅封となりて後水尾院のとへ伝られハ柿本画像
巻物も入られ相伝とハならぬもの也さて幽斎ハ御扱済りて
和睦ありし城を渡し紀州高野山へ退去ありてそれより帰京

の法師勝利によりて千首の無上法王と歌か無かを詠し文まて道か
而の時和聴して誠を渡されけるにかかはらしと申されし
ハ此歌歌の秘ともいふらしなれとも勅命なれハ是非なし
と申されけり是よりして以今の事あかりしとや

○東野記下 紀貫之卿古今集時卿此傳るゝ古今傳授秘傳之
一ツなり 巻歌口傳

○耳底記上 御幽斎口決 古今しやといふもむさと秘すべきにあらぬに
門中共よハ四十年過まても古今傳受なしとかく是ぞ京ハ
十六まての傳受なく
基俊もなれの東国迄もくたられしを祈られしかれともおかつる
るを定家の都をも霊夢なかしくおさらきて霊夢によりて
せられけれハ基俊といふものも逢ひにけれ上法師の事あらく

と申さいふちにの貫之か歌傳受の志ハ、傳つたへけり

○今世かまを定家卿に古今傳授まつといふ事
ハ此の書を見しやいふりし明月記にも此の事もかくて
その御法ゆへして 俊成卿古今集の定家卿も古今
傳受のよしくも家の事ハ此の傳へられしなといふ事見え
また傳受といふ事ハなしまた基俊の貫之のの傳之
られしといふもおかしからすやまた百年のあまり後法
なき傳授と彼人の傳へ給ふといふ事貫之の後法も傳受
といふこともにて人のなさにてものかしきとや東野州か縁の
時よりはしまりけり

○貞徳奥書　右之一冊文禄二年十月十三日ニ亡父法眼

「集　此の集両度ニ奥の哥まて一の巻を聞き御伝授の秘事　大かた

悉く書とゝめたるか　御師九条殿と紹巴の両人大小紹巴まて書付

清三なと西洞院と奥書ニ英判有り　是ハ三光院殿の御奥書

ニ亡父御奥書の清書のまゝ也

○今案ニ貞徳ハ入ころの貴の流ハあるの方ハ入りとも

見えし　此清書今伝受ハ家のきさるの様ニ　見れとも

とりあやしのまいりの方の物の人ハゆるされけりと書きものゝ

古今集　三鳥伝

閑窓見説　　喚子鳥

喚子鳥ハ伝ニ猿ともいひ又ハ不知鳥とも云なとゝ

いつれも也よ静かなる所ニて声をきゝ物のとよむ二鳥といふ

来る鶏群　　百千鳥

百千鳥ハ伝ニ鶯ともいひ又ある鳥とも色々ニ鳴

ゑて来たりかゝりまさる物と百千鳥といふ

道々　鶯　　稲負鳥

いなおほせ鳥ハ伝ニ世きれいとも鶯とも云ふ

何にてもある物の声ありへつ世ハ人におほせたるといふおふせ

鳥といふ

古今集　三鳥伝古後称尾院御筆識

中山中納言孝親卿所持秘也此伝不入書代へ書

同集中　三木こゝろ

をかたまの木　　紀友則

三吉野のよしのゝ瀧にうかひ出るあはをか玉のきゆと見つらん

神鏡とさしてをかたまと申し鏡ハ朝家の祖神

神なれハ天子なりの内侍所ニ　天照大神尊容をうつす

行法ヲ修ス也鏡ハ人の鏡にて御影を移し給ふ　天照大神

以テ宗廟の御鏡也此鏡ハ御恩光也

右此を讀伝ハ切紙

○再唱記中　壹百六十首　是ハ一首二と此歌ハ讀始之ため

ハ此之一首九首ともよみしさすらハ合点の事をゝる之

○冷泉家秘授子皆伝こゝ也

○桐原侍従　三　享保六年五月十月廿七日侍従冷泉家

二年三日神ともしもとし　廿八日　文庫出席三卿秘指南する秘

授子　霊元院　院御所より指南ありし前中納言度大納言為村卿度門人

入家候ふ物厳説する秘授子の指南返々上日　二首の三

積勅にて依家傳書写誤て勅許也

○秘標目 冷泉家の先代に家の伝来の書悉くちりうせん
としけるを雅章卿中納言の祖父とかやいひしが、このことをなげきまして
霊元院様の御時にそのよしを奏聞ありて家の書どもを勅封に仰せ
られしとぞ。ほど経てのち二条家とおこなはれし両家の古書どもに
悉く目録をもて写されその後は又勅封をかへされてそのおもし
ろく今の村に、みな四十歳の時、家の——皆御覧の宣旨ありて勅
許されて一通りまで写されておほせありしとかやつり、その勅
帯目皆御覧につきてはかかの家にて他に見せらるることなくして必家々と
伝へてよろしく執せられしなり、さて享保中に上皇院様の御時
御覧ありて家の書ども上られしとぞ。源通信御沙汰ありし由

撰集の和歌集のこと
万葉集の末天平宝字三年より古今集出来し延喜五年
までは凡そ百四十余年にたりぬれども昔のさま大方かはりまう
すべての延喜五年より仁平元年までは二百四十六年なるを
その後撰集拾遺集後拾遺金葉詞花集の五集は出
きたりけることなれば四十八年を経て保元元年より世の中乱
れて年をつみてなかりしより文治四年に千載集撰せられし
このころ二百四十年にはあまりつかなることはなかりしに、その後
後円融院の永享十一年に新続古今集まで十三代の集
ころ新世の中に出来たりしにあらず、それよりはそのこともたえてきこえず
元和元年よりそのころも江戸の御政をおこして世の中はしづかに
治まりしのちもさきざきより京の歌人どものへふみて御代ともなく

ふることゝいへりけるなれ

撰集并に序之作

○耳底記中問 為九光院に新古今よりたとへ一首/\まうけ

定家の歌十首のか七首八首みな定家卿なる歌多りといふ

ますらも 有家 雅經 新古今 家隆 有家 定家の集之

新古今は それなりとて 後撰 寛平まて 為家の中とそれ

て拾遺後撰といはれなり 其ほか百人一首みなし新

勅撰の同

三代集ちと云まことなりとて千載といはれなり 新古今の花

るなりとて 新勅撰を定家の是として いはれなり 千載 新

勅撰の中とゝりて拾遺後撰と為家の撰せられなり

○万葉集 又千載集 新勅撰集 続後撰集 この三部を

家の三代集と云 俊成 定家 為家の三代の撰なれはとそ

古今より新撰集に入

○耳底記中 三代の撰集いつれも古今と申して集へ入られたり

集へ入さ後撰まて入る事 新古今の歌

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風を嵐といふらん

是ハ秋の草木とよみける歌なれハ昔ハ嵐

秋の此れを申 秋の歌に入るとて 嵐

といふ字を入 嵐と秋の歌に入る如きはいふへし

宗匠家

○東家之称　第一　宗匠家といふこと往昔古今伝授あされ
しは宗匠家とは号せたゞ只和歌所と号せ　位何にもせよ
当人にも世々伝師範の御家也　其ことをすなはち　宗匠
家と号するはあやふかりし後たりしてすべて宗匠家
と号せし後ニは地下町人百姓和歌の宗匠をとりて宗匠
と号するは宗の字漸りし　和歌をとりても和歌もとも宗匠と
いふ時一人のことの之二人は其之をも古今伝授の
時も一人は保守をうつる宗匠となりの座まれぬ称之
これと号之は町人百姓まで　和歌の宗匠といふは　継伝の其
者の認めて其之は宗の道にいふことと云ふべきもむくしかし
其故は人の位せられし

古今集相承地下伝　堺伝授　奈良伝授

○続世々名称 一町野州平常縁の伝来ハ紀貫之　基俊　俊成より
古今集の相伝ハ之二条家ハ為世より　頓阿が伝へて
経賢　孝尋　尭恵　尭孝　東野州常縁　宗祇　逍遥
院実隆　称名院公条　三光院実枝　細川玄旨法印と
伝来して八条殿中院通勝烏丸光広卿等古今伝へ又
宗祇より牡丹花肖柏へ伝へられし流を堺伝授といひ又肖柏
より南都の饅頭屋宗二へ伝へしを奈良伝授といふとそ

歌道二流
○東常縁以為當　基俊俊成之女院　顕季六条家
歌道二流大略如此
基俊ハ大宮右大臣俊家公の男にて右馬佐也
顕輔九条家

歌道二流
古来ハ基俊俊成之女院　顕季六条家　顕輔九条家　此の二流の内ハ
俊て二条家冷泉家京極家二流のと伝へられたり此ハ俊成卿の孫
定家卿の男為家卿にまて三代の保ちてはみけるハ世の重なるにはしまり
まりその為家卿の後子為氏流ハ二条家為教ハ京極家

とふなり二条家ハ為世卿より始り頓阿 経賢 尭尋 尭孝
東下野守常縁 宗祇 逍遙院実隆 称名院公条 三光院実
枝 細川幽斎玄旨法印と伝へ来て今世ハ八条殿 中院 内府通村公
烏丸光広卿にて柳原 飛鳥井の御事伝 又和歌所とも申し
冷泉家ハ為相卿の家をいふなりとりわけ

和歌六祖
樗地氏の家に伝へし 和歌六祖の図といふものあり其
名ハ未詳しく葉によるに二条家の三祖ハ 人麿 貫之
定家 冷泉家の三祖ハ 俊成 定家 為家といふこの両
流の祖を合せて六祖といふなるへし

判者十体
○十訓抄巻三にいへる 歌の判ハその道の上手ハさらなりまして其次
世にも許されたる人のすくれたる後徳大寺左府ハ十体
わからん人ハ判者になりがたしとぞか 源中納言国信
の家の歌合と俊頼の判者たりしをば 基俊の判ハ顕昭
奉て作基 俊頼と共にあらつき柾てのすとも世にあまり
けるや其無学のものハ人のすなれぬ
故に十体とハ学のわかりへ程よく和歌の文字に利古なる
其以下業とし

哥道傳来由緒

○優雅之称（中古一世紀初年）哥道の傳来ハ紀貫之基俊俊成と古
今集の秘傳として二条家ハ為氏為世より頓阿へ傳へて経
賢堯孝等　堯恵　堯孝　東野州常縁　宗祇　逍遥
院實隆　称名院公條　三光院實枝　細川幽斎法印と
傳来して八条殿へ　中院殿へ　烏丸殿家へも幽斎より傳へ了
宗祇より牡丹花肖柏へ傳へられし流を堺傳授といひ其れ
奈良饅頭屋へ傳へしを奈良傳授といふ

六條家

和歌の流乃ち六條家と云ハ六条修理大夫顕季卿より初りしが其男左京大夫顕輔卿其男清輔朝臣その次顕昭法橋是也 俊成卿も初ハその顕輔卿の弟子となりて顕広といひしが後よ左衛門佐基俊の流を学ひその弟子となりし故 是も俊成卿ゟ二条家の流ハこの基俊ゟおこりしかハ その基俊ハ貫之卿の女の伝と申より盛なりといへり

二条家　冷泉家

二条家とハ為家卿の後二流とわかれて為氏卿のながれ二条家と云也 為相卿の家を冷泉家といふ也 俊成卿の父乃俊忠卿をも冷泉中納言といひき

○続世名林 中古 両家同年 二条家冷泉家とハもと定家卿の住宅 二条近と冷泉とて書表ふたつありしを二つにして表の二条の方より為家卿ハ為氏卿ハ二条家といひ書の冷泉方ふ為相卿ハ冷泉家といふ也 冷泉家ハ上冷泉下冷泉ハ為尹卿之

歌道師伝

○我国記（注記）和歌に師匠道といふ師伝といふ事あるまじ
きとさへ人まなびたるハなかりけり之ミ万葉集とみえたるに
うたよむひきと讃ずるをたゞ人丸をもとにして石門の末つかたに
つたへ伝へのひたちのくぞり続国ハ古続にかへりて伝来ハ基
俊より伝ふ又此本歌を俊成に見せて与へハ定家の後京極
殿に程子の様なりしが如く自解し伝来する人なきも費之ニ小
野小町ハ古の衣通姫の流れなりといひ伝へたり皆比の家
まハいつもみなも人丸の伝ばかりにて正しく悉郁法師ハつゐに
のゆひしく

歌の父母

○古今集序になにハ津の歌ハみかどのおほんはじめ也浅香山のこと
ばハうねめのたはぶれよりよみて此二歌ハうたのちゝはゝの
やうにてぞ手ならふ人のはじめにもしける

○又きよに難波津に咲やこの花ふゆごもりの歌ハ仁徳天皇の
御代をいはひ奉りしめでたき歌ハ（百済の）王仁がよみしとかや父とせり
浅香山のうたハ采女の葛城王へよみしうた 二歌ともに人とよみてさだめて
みなれハ母ともいふべし 二歌ともにたとへてはじめ
めでたき歌なれハ母の如くに世をたすくといふ　嘱へ来れるか
かよひつゝ初学の人のためにもちゐ初めよむなりと伝へ
かつ歌ともいふべしと云ハたゞめでたき事を人に原氏物語にも
そのよしみえたり

詠歌幽玄

○神楽催馬楽源氏住吉このむ幽玄なる人の古歌ハ心を種として
心を根とせんとするに何れもして心をしらずせよ調ともなし
まことのちなみには風情をとりて也又風情をとかく深きも
らいてすらう成習なし古風と向して古風とう間さるてうる
一かうん体りとや

歌の父母

難波津浅香山の二首は歌乃父母とするよし古今集の序にみえ
たり又源氏物語を釈するにも功徳の母とするところ作れりとなり
又母ハこの根元といふ心也華厳経に信為道元功徳母と説り
又歌をよむ人も信為道元功徳為母と見へけるかなし

大和言葉　　やまとことの葉

皇朝のことのはハおほくは大和言のまゝなれどもからめかせてハ歌
歌をよみて和歌といふハ三代実録に初て見えて萬葉の頃まで
いづれも萬葉にては和歌ハ返歌のことにて詩の和韻の例なり
その後には漢詩をからうたといふにむかへて和歌といふなり
よりて和ハもろこしに対する名也未止にかへり額ハ古止乃波にかよふ
これハ漢詩とならべいふ故なりていつもやまと心といふ事もまきにふに
人何れもそれハ混同かきりなきに似たり上古ハことにかれ
めでの世までハからもいふまさなことのはげしきいへ源氏物語にも見え
これハそれから山葉までをさいふにつけれりさればその古へ
のことばもきこえてひとつかね和歌といふもしのとおつるハかはく
くつきならむや

○源氏物語　桐壺　一のみこのかけられ御後見まゐる元服家の御乞亭
子御のかしらゆひにて伊勢かたりよませ給ふ歌　────　むすつこ
しのこゝろそへしその色もあせずはまつこたにせさせ給ふ

大和みことの家

○千載和歌集序　藤原俊成卿　大和御言家
やまとみことの家は　ちはやぶる神代より
おこりて　ひさかたの天のみかどに　ひろまりきたり
さかり　みそひともじの　かたちを　ならべ
の中ゆり　七文字の中と　をりて　うたよみつゝる
つゝみ　ひらきかひて　ひとつ言　とし　ゆかり　一文字
つゝものいにしへも　のとこゝろ　しのぎ　志き嶋大和みことの
ひらきはしとのゝ　そへつる　ゆへ

○新後拾遺集序　為重卿　志き嶋やまとみことの家は　そのこ
ゝろ天地ひらけしより　おこりてその　もとつ　名方の神代より伝
はり

歌合　うたあはせ

歌合といふものは古の世にはなかりしを今の歌となりては
もその初めつかたなるべし光孝院の御時にはあり
て初めてこの事出来たり寛平の后宮歌合あり時
に女郎花合のことありしを始として新撰万葉集一名
菅家万葉集といふ是菅丞相の御作也　にも多く此時の歌載せたるものあり

御製躬恒歌合序　作者躬恒は歌合といふものの上古にもあ
りしと見えし伊勢なる人はさらにけるにや　亭子の院の
の御時よりこそ見えたれ　初めの歌合是

歌よみ家作のこと

○東野州縁由なし　尭孝法印常光院の法師と申しける時より藤原是文
に歌人御入りしかたき家と木の方に家作りて南の傍に天下に高
一と呼ばれし歌作と上手なりし　何事多持はまたその後
常光院と云ふはさ此時御名也

玉の歌濃

玉の白く乃歌濃し常夏の花之玉の花玉の男子の惑しく

○大和物語上泊瀬の御たに歌枝物にはじめける人をとむりけるの
まことめしるかうりけれはまうてなりける
数かし数有よおくよしの白玉はひろうへく花物まそまける
とまう六なりけれはつんすみて何ふありしらの玉の歌濃也と
ろへのなりける

八病

○白氏文集明本廿八賦賦 諧四声祛—— 信斯文之美者

○詩歌の格調をたゝすに病といふあり四病八病等のるり古
へよりつたはりし式にも見えたりその病といふは西土の
沈約より初まる也唐の大対氏か潤人家巻三声韻の余まなく
周顒好為體語因此切字皆有紐紐有平上去入之異永
明中沈約文詞精拔盛解音律遂撰四声譜文章八病有平
頭上尾蜂腰鶴膝以為自霊均以来此秘未覩ここともへし
此四病の始りといふへし

御製ノ攷
天子の御著述ハ詩歌とあふ文章にても御製と云ふ事なれハ御
製歌といふハ万葉集第一の御子 雄略天皇の御製歌、あり
仁徳天皇もこれより先のことと例也

○鴨長明無名抄下
三ノ詞糟糠
二条中将雅経讀(カタツテ)云ふにハはりしれるくもがふ
とおぼゆるすのあるや乞食といふたりのあるふ
月ハしるやうきよの中乃たちのうち代
なかめても又いくめぐりとふ
うれふるしくあるよりそうてよの中の中と
いふなりしかいうらわろきるうしうきよ
乃まうかきをもいたむるかまし
又新古今に
すゝの雪月乃日ありまよこきまれて

わたるあきゝぬ人のさむけき

これは都をとほさかりしころきく月をそ

こきまぜてあらはい海まてうかししかは

ゆくきやこみても栄えとは歌の中にきすみなし

趣もんふかくなりしいさかんにへつきなかるへし

歌屑

○洗耳堂　上古今　うたくづ

和歌二松とりしきまの歌にいはしの始むかしの志

しくいしあふれはおりしかし歌をしかまも抜もやさしき

しく歌数此頃の歌は一つおりしくいはりかくまりとみ畫るはいつれと

やまき歌とその中によいつまなや主たるの調よ宜しくまきおもしろ

るは歌し見し〻魚よまるとのなりたましみとよつるは古今集の中にも

歌くりとりやいのほくされとの一の出人のすなみへきてらかしと

いろくまて出來の歌には爰個このおもひのこ多しけ歌よかきりしへかく多

ならんれにまきまりまし源氏物語よりものとふ歌しもとそかける

○紀貫之集

歌よまる哉歌しかしに别段のおもむきくしもおもしろくをみる

○河辺　出仕々けむ歌前集のとおもしき古今にも抜まつるもつり古今

集の中にも歌にまりといつ歌る人の定めりとるまでぬ

和歌文字有三説

万葉集并山上憶良の家の序にかなを並へる事二字ハ哥に 詔
和歌とて唐詩にむかへたり其後三代実録に業平の事哉いへる所
も倭和歌と見へてありこのをつかはるゝ和歌といへる万葉に
集に和歌と見へしハ和歌の字にて此方とある門

歌学問 うたのがくもん 家学

やまとの学を家学者といふハ儒者なんとの如く知ゆへなれとも昔
ちかしきハなちりしたも古詩に家の学問といふすへてそれへてありさる
間ハ家々の伝もありへれハ猶すこしふみ入りしもの

○大読 也又大鏡を引大の之の大同を後より円よりの心をつける哉和家の
かなやわかくれけるはりん家を上に家 福徳といふすなわち其ての人の
人にいひしもかくすへき家と家の かくりんをいのする事にさる鋼者
後ハりのそのゝまへさりけれハ

○歌学二条冷泉二様
二条家冷泉家とその流にまかせて家々の風体さだめたり
二条家には古き人の言葉を用ひ冷泉家にては詩を用ひられしと
されど冷泉家の新古今なりしこそ和の歌にては古のさりとも
なきにしもあらす古へは様々のことく

三の袋　うきふくろ
今世まで伝へる所は極秘にて他に見せずして深く秘する故にと
いふことのくさの　古へは心にまかせて書律

○夫木抄　永仁元年　撰恵一百首
為家卿の歌
ほとゝきす鳴や情の前雲おふつゝむとしもおりしもいまはしや

植物動物
我の類までの名目までの初の選までは何の物の初は周礼
にありけり
○文選第二西京賦張平子　緜垣緜聯四百餘里植物斯生動物斯
止○呈薛綜曰植物草木動物禽獣也
○周禮
動物宜毛物也植物宜阜物也

歌枕

うたまくら

歌に詠へき名のある所をいふ如く旅よい所ゝハ郷ともいふ今て名子
枕ことの枕詞それより名所も歌の名の枕なれば云なり

○袖中抄上 歌の中略のことはしくとかく此事をいふなりといひ又はいふなれと
其やうなしまくらつる所詞詞も枕もなしの人のあるはさし
まくらことのにいつきたるもあれ不きして安しきかけ所にもあれ
もふうしんも

○古今集序 文字に人ゝ扇とりしてかたくするところ人々は出身ゝ藤縄
とう歌ハ白金こう此詩人の貴ゝ歌人為と入削抄としえもしくん
ぬ流のふ人のゝ人て云ゝはに歌也詩也ましく平性の歌枕よ足あ
かりたる所にあらとせつきのかすまた

○源氏物語玉鬘の巻 よう月のいみ子ゝ歌枕

○花鳥余情 歌枕とハ名所の前をいふ時まらとてうつ繰り言源
氏物集の歌枕作り

○歌の長点
○鷺水閑話に点とかくハいふハ和歌よりはじまりて長点ハ
丸星ゝとはしめて点とこふ人いかにもよしあるを 斗
とおふハ朱精をつてそつて丸形を横に有のしるし
とのべるに手かしみて初つめのかどにまくくる上にまかる
ねてつまるやうにかくを長点といふ
○大坂に一時軒惟中といふ誹諧師ある人の長点のことを尋
ねしに答ていはく句の面白きに点を付て
句のこまかきまでも心をつけられ候面白きにハそれて点い
きこえけるはそれよりしとなりておのれもいひしふれハ
やりて長点を付て一点をみたるものなりとぞ

合点　がつてん　てんとかけます

是ハ彩撰六帖なとのことく五人の人々の同題を詠て我家とのたまひき
きくに只人の家々合点して評判せし哉しといへるものハ人々
点をかけ候事也　辞なるを前後の点もおなしく二人
の家道に点をもハ合点と申すきわ哉らしといふハ点かゝる
人の深道して是一人にすまぬ哉評の中に書て合する之

○拾遺集ハ建久二年九月内侍のきくへ天王寺太子の御墓
あらたかにてその所に候文を詠て八月一日御法度にて
百首よみてまゐらせ侍りしすゑの口の御をおもひかへりて
異常の撰者にたゝ大臣家にかゝせまゐりて実名にあんしする
かゝる事をも御かく入りて点をも家をおくにかゝりつけたる

御もいかにいましめてかし候人の法の道も一とのたまはれ　入道殿御
○いまよひの此御法八月二日を使にて見給ひ　おきくりける
人にのみとりていかめてけるに　御歌寄来の見の申もとむるに五十
首の家よにいりけるにて　きまゐるも其後つかはしてまゐるものにしと

さとしぬるハ百首に十八首にてんあひぬるもの申し
人の申をあひかなへるハいかにもめてたき事にてなむ

撰集撰人不知分
○耳底記中太りて撰人志つまといふるにつきて出人名人紀
の事勅勅の人御ことに根本は不知なり

結句の字余る事あるなり
○古今以上四字五字の結句はまゝありて前句の字結ひとあるほどなり
五ハ七言三とこあ後よハつ五三言と前句たとへハ古今よハ
やまとのことは　秋やまの紙は　かつまかへしやこれらのあれ
ひは四言三言とちまうし又古今より後ハ三言といふ事しきし
立や字つる　のこけかうやしけるおほいに言ふ文字を
くさまし　野ハなりみるを　おもしくれしれ句との初にも
まさハこれらさまでも五万葉にも　中古の歌をよみ　かり
のりおもはるへ　いまむすひてふ　この歌にしたる古集も
こうしとやいさん　なつきしいつるふとの也にしもあしてよ
のまする六言　のみなよあやまりて

賦句　詠句

哥の體かハること詠賦の二字なり　哥の様この心ハなき
賦句ハ心をかすめて物にもたせたる句也　詠
句ハ心をすくにいひたる句也

○再昶記上　同　爲丸花底に哥ハ五句なれハ體ありたるやうなれと
若田川出典五句なれハ體きなる心つくしあつまきと　立行かれとも
その上前の發句に見るまてハ體の心こそうらんけ哥體とすこせ
とし今はゆうこんとふこの賦句なりとふまりて面白きくおもしくハ
賦句の哥とも面白きまくりのく

哥のさまと花實とになるなり

○群書治要序　例葉春華秉秋實　庶弘茲九德簡而易從

和歌を古今琴に合せけるは

古へハ和歌と琴と合せて用ひし事ありけれハ歌をも琴にあはせてうたひけれハ
うつして琴にのせて用ひし也さて歌と口にいひてことにあてゝし
さ語るは今も常にもする也さらにうたふ古歌の耳ときゝ物をいふ事もにいふ
へきとも今ハ世にたえたれハ秋津にも詠出る歌と口ハいへと
いまにあはせて琴にうつしさかなる事ハ文章のみにして実ハ大ハしらすかれとも歌を語るに流
しかれハ御かたはらにいかりし人やも語らん
歌のうたひとはうつる其の目に見えける也

○大隠の八大いとせちなるやましきひとつの時 天暦村上帝 河のおとの萬首
歌の此所の歌の心ある帝久しくいひやのつきりける秋の夕
萬に琴をとめてうちあひしいまつせなりにて何かハ
またいひしと人やたてもおのつからしてせめて何事をしのあはせハ
さかめしにあやしきおもの久しきにたち松風の音をきこゆる
とりかくし秘ことにせちなる心をしのひ楽にいることこそいとしけれと
いふて語りかはしけるとしやる

○動天地感鬼神　和歌の徳

○古今集真名序

○風俗通 第六声音一丁

○荀悦申鑒　君子之所以動天地應神明正万物而成王
治者必本乎真実而已

○群書治要

○文選 東征賦 曹大家　好正直而不回兮精誠通於明神

○毛詩序 卜子夏 故正得失動天地感鬼神莫近於詩
先王以是經夫婦成孝敬厚人倫美敎化移風俗
○庚開府集 後周慶集 為晋陽公進玉律秤尺斗升表
二分二至行于司暦之官九变九成 被於和樂之職足
以動天地感鬼神
○慈恩寺三藏傳巻五 驅役飛走感致鬼神消息陰陽
利安万物

和哥によりて枯樹の再生せし事
○古源氏等八良岳寺花樹の峯木の陰みたりしもおくまくすりりやね納言ハ
仏具を奉るにつけれ峯木のいろをと名の薬をくまてあたまくるありて
峯木にみやまでさせらするにいふかとしおのはけりきてられ名あるやふて
いやもとなりけるに八幡の宮もかひさくに面しみてふる石清水の
坂のあたりにつくいかりはつくしあふの橋の本におしかれなりけるに立
よりて
ちはやふる神の御前のたちはなももとつきも木もなりにけるかな
ことよみたりけれは神仏御納受ありけれはひさせ給ひて橘も葉さし峯木も生ひみまさ
ひとしなみて峯木も木さかりけりとぞうけたまわりしかとへハ貴僧
の清むるよとらやすらふれ橋かとるにはつるもしなるいとしさすれハ
さらや仏の法へて御かたもならん

京ノ楽所古人詩作のかを評する比喩

○輟畊録巻四 論詩 國朝之詩称虞趙揚范掲焉 范即徳機先生梈掲即曼碩先生傒斯也嘗有問於虞先生曰仲弘詩如何先生曰仲弘詩如百戰健児徳機詩如何曰徳機詩如唐臨晋帖曼碩詩如何曰曼碩詩如美女簪花先生詩如何笑曰虞集乃漢廷老吏蓋先生不免自負公論以為然

歌仙一双

〇十訓抄 巻二 近比の歌仙にハ民部卿定家宮内卿家隆とて一双にいはれけり そのころ我も〳〵とたしなむ人多けれと いつれもかの二人にハ及ばざりけり

蛙詠歌

住吉記云 住吉の忘草のこと 紀貫之住吉の浦にて忘草をたつねけれハ 或女にいひて忘草を摘てまゐらせけるに 浅乃日好けるにかの女歌よみてつかはしけるに 又蛙の声をとりあはせける とよみれハ歌く

住よしの濱のみるめもわすれなてかりにも人をまつとこそきけれ

〇新和集 上 廿六右 十八蛙の讃歌之事

蝦蛙の詠歌

蝦蛙の歌讃といふハ 西王母も後世のうたよみて 方 秋岸
鶯の侍よる 韻記蒙求中一句といふ 又王十明か前集にハ 蛙呼子曰の句あり

鶯の哥詠しより

初夜の鶯ことまハ来れるもゆくへをかへるもの侭一に
この哥は漢文字よりうつして見れは初陽毎朝来不相還
本棲といふ三句の詩なりけりしより

○雜 和泉 廿六 石上 鶯の哥讀しより

歌の切れ

切れハ上の句五七五の三句又下の句ちて七七の二句
なりこの切れといふちからは連歌といふ

○後撰集六 秋中 あきのころほひある女せうとの許に
たちのうちまに侍りける男の哥のなとといひ入てちかる
りれハ来ハらちより 讀人しらず
しらつゆのおくるゆふまくれ越すれハ女のいろかへるとしるかな

○百人一首和哥

此百首ハ哥道の秘哥古今の習ひといふなり

哥仙とハ　人丸　家持　忠岑　經信　定家

七賢とハ　喜撰　康秀　行恒　能因　俊家卿　行平　家隆

歌題

よに歌なかにもむつかしき題といひて 烟十文字なといへるが
めでたきよしとて 例の雅歌百首なといへるより始まりて世に
も人のえ詠みがたきむつかしき題を作りて 後も歌題
とつけてものゝ名をもいひつゝ 明経の小説の五色石といへる
たぐひの類題目の字をいれたり

探題

さくとさぐる

○後撰集十八雑四 太政大臣の家にてあまたの題をさぐりて
歌よみけるにまきといふ文字をえ侍りて 藤原きよたゞ
我おもひしめ草葉にも置く露は思ひなりけり袖よりかけまける白露

結題

このつゞきを古歌よりかぞふるにいふなりし例より歌よむむすび
などといふをは詞のかゝる体なり 律賀などよりもいへきかれし定家卿
の明月記に貞永二年の頃おひ年号文字の及日没するに草書を
書す結ツカヒ依て延ー ありしまでも結ハ即つかひとよまれたる
の事にて用ゐられたるを古へハこの結題をつゞけ題といふへし

○かくれしが 夫くれハ
初句ことゆゑて―――時雄不審也 ―― 初の文字の題は
ふハ初のものゝかゝるへいふを 秋かとよむ文字くれたるに
淺撰 居らうし
まくれハ 指き
文くれハふかきとし
月
花のまとうのも志つゝし
後撰秋下
君といふのいろかせの山も秋くれハ

御賀歌作法　安重抄歌と曰り
古へハ歌といふ事多くハ口つから唱へしく又口すさみして詠し
てもこれも又くハその儘口つからこそ歌へしに唐の文詩もその
古へく詠参へつりて　もとしるもよるよる上古より見えたり

○賀算歌一御賀歌作法也和歌両執者一夜之人席重口つから
ら御く次人ニ指次人又重又疏歌次人ニ共渡り也此展讃之
九首歌宴也此
万葉集六　天平十八年正月　旧書太上天皇御在所橘諸兄和歌左大臣
橘卿応詔歌一首　応詔作歌　応詔作歌次　嘆之時不
紀之歌漏失して其文此也　石作良兼宴同之
古物にかきしけたり　また　今まいらる大略此等
読重　先祖也

侍従は 難波親通にて 補釈の侍しハ能宣の梅の歌よ居して
みの白き梅の月影に常よりも一入すかりまさしうかたりけ補
釈の梅の侍りしは能宣ハえつりかまへるしきき侍りし梅の
とえ補中侍りし歌のまへにいとよき花つてよき侍りと申し
さきみれは梅の色と見しことハ白月の色にこそまさん事
能宣もいふ侍んとさいりへつれて侍るハ行きてつかまつる
よりてこそやしりその伝と而花まて有やうてかかりける
又能宣一集にも東白居人去る志てきましく来りて旧のとた
へりしま親を能して 丹後掾好忠なかもしけ侍りやさし
侍るとて
　アクセこそ紬白妙の花の色にそれなん梅ころかはあるめる
かくし
浅きこそ色ハきしけれ 去人ハ梅らめハ梅なる白しまし侍る
紅梅を句く宮めるいそんまゝ 人に侍こ申けるになりてなるし
こ思ふをも見えれさいつく

同集にも 小一条左大臣良経公 同じ梅をとなん歌の御所よる
伝給仕て 九条太臣のもとりまして 上達部あまた人々と御何事
ありて 五節の歌をうたりて 左事と言ことおつりけるみえと
仰せありつりしまかなてうけ給りて
　白妙のふりにも色うしく人の好とは見るやと思ひ給へん
人こ式歌をこ色を不審仕大臣なりける御宣に記事として
祖母の居る為の又は居る宣と梅をも下さるや
けふ後撰集の御のかくの秋何する[illegible]
て[illegible]

新勅撰
後堀河院
○増鏡 上 貞治 新勅撰の色こそ集の詞書さへ人数のほか総家の
ひらきの名まのたえいられの作者まよりまえん 後堀河の歌の
およ新勅撰の名を見しまいらせ 此外の人々も新勅撰のさま 定家にい
まさきて

十二月 和歌所
月次和歌
○明月記 貞永元年 六月廿日 月来撰和歌 月次 十二月 不入
源氏 奏状 撰和歌 相当其撰 御返事 雅 元可御座 院氏
出雲少将中宮権亮信実 此右撰定衆
此撰 新勅撰 東宮 定家 大夫 御返事 新撰 御作者 関白 左大臣
や東宮并家隆 及和歌所 家衆 十巻撰 毎月 大臣 頼氏
統又加一 及近之由 新撰 入 以後 御撰 具 入道 日記
十巻 件撰 目録 件 其日記 此日記
寛喜 文暦 信実 信 大夫 中宮大夫 自歌 新撰 撰 在
入りかく
重出 和歌 所 信実 此間 此歌 被撰
件撰 文 伝 信 大 大夫 又 件 付
被 十二人 之 破 月
正月 叙位 二月 除目 三月 天福 寛喜 五月
三月 但 叙 新勅撰

五月 紫式部 日記 六月 業平朝臣 風俗古今 七月 清少納言 伊勢大輔 八月 道信朝臣 宗于

九月 和泉式部 源高明 十月 貫之 清女 十一月 定家朝臣 西行法師 十二月 四条大納言 小野小町

二幅 源氏 長恨 書風 李杜 傳 軸 新錦 紅梅

入門屏風事

○明月記 元久二年三月 一日 入夜中将来 廣下依之——

——之相当保文治之句編之中出様之事又無和歌

之由被問新屏風之事 此事可無格別之由 有之及

可然事也 必竟之先是須申此事 和歌之方受人無

何事事 但此格縁被説出之保之後和歌法書可被

異論 而文治頻有沙汰 但将屏風御撰定時大殿御定

新撰之 様備之由 許可被申 由後之古人之之古歌

猶不被用旧物之新撰屏風和歌之定為先例 猶由不申

不及之也

教訓乃和歌侍

平の時頼は和歌百首を撰て教訓として鎌倉執事

親当に和歌二百首を撰て感化せしむ古人の歌をも

古今も上世よりは末の世の人をいましむ栄の隠夜貫之詩を作りて

自ら雅言め華美子孫よりの之世り新古今の季に花園侍二十

篇を作りて卿関の教として文明の満宗の時に韻林院

又合まして更に門則の彩侍を撰作り二軍に合歌いして天

下の帰教をなさしむることも国家をかん

○百首和歌

○東屋殿御歌会百首これは堀河院の御時に四季恋雑にて……

いま大臣に見始したり

此集よりも前に源家の東子の百首あてて又これを知らせられ堀河百首を知らせられ

これは東子百首を知らせられ進上し侍りつり

○八家侍歌作者

○湖月八景和歌　冷泉家説にては定家卿作とあるなり

○武蔵八景歌詞　宗祇作と云　二条為重卿御作と申

○近江八景歌　或説に飛鳥井殿の雅経ゑらひし人あり年

号未詳

○同　一説に近衛信尹公政家公の御作と

○同　或説明応九年八月十三日近衛政家公尚通公御父

子ヽ侍りきさう紙に書して其の時御出られしとそ　以下同前
永禄中年の八月十五夜下向して　仍ミ右中将
○右此一本永正二年政家公の筆也　已上六永禄五年八年八年に写也
これは物語考なし

檀紙　なし

○東頓宝積並懐紙ハ大昔ハなかりしとかや清和天皇
の御宇ニいふとのうちのしと申といへり貞信公の紀
まへへよりて卯杖 双紙にかきつけ貞信公ハ延喜前後の
人ニ清和天皇ハまより前之御時へ七百年か卯杖
の双紙といふハ一巻にて綴なきもたて清和御宇の
根双紙もさしハ卯杖に落てつるのちらんゆへハ根
のあるあるもたてつりといふハ今のもはのうちふる返といふ
その言葉の依風之御堂の関白殿秋度と造しせさるを
記したるうしといふの

短冊

短冊ハ上古よりのものなりしこれを申すにわたらすして今
世のもし必おハ短冊とまいさハ自筆ハさきとして心ある事を
やるさといふるハ後世よりはしまりそのゝ短冊に始ると也ひとつふ
東山殿の御代の関白殿の時ニ始るといふいふんとの始より
始りしるすなる

○儀式ハ短冊ハ短冊ハ押紙なり和歌懸物ハ藤也いかんハ札の式度ハ附の探
題目ニ題目ハ別題名ハ題ニ書なり又短冊ハ題追加ハ和歌なる

○亭代記下廿六帝ニ延喜 億のまけるニ世ニある札ニ何
なりしてけんかくせり短冊ハきこえせし きこひるんもたま
へき大臣のこの記たるやまきの永殿とさくかれんとのなるけ
かりきなとて依風の傳への卑ニ一師范て 中将の内談なとそ

志つくしける或府廿斗なる法師不問に上忘の短冊を硯ふたの
蓋にのせてさしおきけるそのうたハ
さゝやかぬ菱花にむすふうき人の烟ともならましものを　より
そとよりしてけれハ或家の人の息女と成て海老とかや
その後ハ法師なりける廿六歳十六歳を一双として
とせられしかハ世にしらぬ人もなかりけれ
○今出川の家の六郎ハ細川備元の猶子にて相国寺の倉蔵を
あるし
○鴨長明四季物語　二月　毎年人ハふミ書のつきはしめの
つきニ文武とらて六位より下の藝能と考へて可
書にさるへいて短冊にのせ不冊とるしてき書きしるへん
あつしよ細るゝことをとかくのたんざくといふなるへし

短籍　たんざく
○續日本紀巻十　聖武天皇天平二年春正月丙戌朔辛丑天皇御大安殿宴五位以上晩頭移幸皇后宮百官主典已上陪從踏歌且奏且行引入宮裏以賜酒食因令探短籍書仁義礼智信五字隨其字而賜物得仁者絶也義者絲也礼者綿也智者布也信者段常布也
○東山殿遺稿　短尺といふは何法師以後のことにいふ
説何れも古来叙位除目のとき短尺中文といへる
ものを細くたちて官位を記す事を書附ならし　沙書
冥の徒短尺中文の名もこれによりて書きつけたるを一ふたつかくせ
かりしよりいふ清書細く見えるより短尺の名　叙
位除目にもちゐてよりこれより来るなるへし

試筆

○羅山文集　随筆我朝年甫学者称試筆益叢
林家作偈者之所初為平官家先儒学士之文集未見
之也宋六一居士有｜｜詩唯言試筆之好悪也

○木下之高壬申之日試筆詩自注　林羅山文集同上元高按劉
静修集有｜｜詩亦同于欧陽也然皇元風推有先一初
丁丑新正｜｜詩皇明文徴有練子寧洪武庚午元日試
筆詩陳白沙集有新年｜｜詩在王弇州四部稿有元日
｜｜詩八題及春日｜｜詩噫若道春叟博才贍智不及
之韓子所謂如目也　○風雅亦有龔子敬病起試筆詩
○坡仙集引東坡大全集雑説驟□驛｜｜云正月四日雑

泗州　○五朝七言律　莫華有明李夢陽甲申元日ーー
東友

○今の學者ハ元之ハ識者の詩ハ元朝ハ始まる事明らか
なりとの前世の家朝にハ云ずる所也但識者の詩ハ云ふ
いれども元ハ平仄を備の音韻を識する所の詩ハこれハ
その事を共ならずして元ハ始り明ハ盛なりといふべし
皇朝にてハ古よりはすなハし言葉お筆家の中世ハ
五山の僧徒に有ることを始めとしてその時代元ハ明より
ゐ知れるといふれ者なハ有也未考

辭世

○木下之高詩自注　按貫酸齋有辭世詩見小艸齋詩話
及輟耕錄又臨終詩叙乎　歐陽堅石耶絶命詞見乎
息夫躬又謝康樂集亦有臨終詩

○輟耕錄廿六貫酸齋先生臨終有辭世詩曰　洞花幽草結良
縁被我瞞他四十年今日不留生死相海天秋月一般圓洞花
幽草乃先生二妾名

○詩歌を幾首といふ

○後漢書十四 北海靖王興傳子敬王睦嗣こゝ睦及寢病帝驛馬令作草書尺牘十首

○前漢書四十五 蒯通傳通論戰国時説士權変亦自序其説凡八十一首号曰雋永

文書ハ通といふ事

○後漢書芸賈逵傳与簡紙経傳各一通

○文撰

宿構

今俗よ詩あるき継をかけて坊まうけしたる懐数とひ謂俗の懐俗にては懐句とひ又るる句をハ宿構と

○魏志

粲 王仲宣 善属文挙筆便成無所改定時人常以為宿構

○什

今詩歌をあつむるの什といふハ何十首を聚ハ佳し集し

あつむの許侍し

○詩人玉屑曰詩ニ雅及頌前ニ巻題曰某詩之｜陸徳明釈曰謂詩之作非止一人篇数已多故以十篇編為一巻名之為｜

○斎東俗談巻四

○詩什

○容斎随筆云陸德明釈云歌詩之作非止一人篇数既多故以十篇編為一巻名之為什今人以詩為篇什或称誉佗人所作為佳什非也

詩魔

詩の魔堺[illegible]

○白氏文集廿九主客忘貴賤不知俱是誰客有詩魔者吟哦不知疲乞公残紙墨一掃狂歌詞

好言　俗語　　まさことたくことも

世間の言語に雅俗の二つあり好言は俗語之万葉集以下の撰集なる集もし人の好みえ侍て出来る代にも人麿赤人の頃ハ好言とそり　後世ハ俗語と用ゐられけりそのほまし定家家隆ハ好言とそり　顕昭俊成ハ俗言をこのめり語世を云り下も漢書記共集子の詞ハ言ふ俗語とこふ侍るの人にありけり世をまもこのなにいわり杜子美李白ハ雅言をこのミ楽天山谷のなにハ俗語をこのみけりされど其の好む所にして工拙ハいわりける也

〇北山璧話上陳輔之詩話曰王荊公嘗言世間好言語已被老杜道盡世間俗言語已被樂天道盡余亦嘗謂傷寒好言語已被朱昉道盡傷寒俗言語已被陶華道盡

国立公文書館
National Archives of Japan